

35. ビーム出力管 6AJ6 について

現在、比較的入手しやすい 6AJ6 と云う 6V6 に似たメタルのビームパワー管があります。ところがどうした事か今の所 規格もこの球を使った機器も見当たりません。現物とカートンから 1944 年頃 RCA が製造し、米海軍に納入したと思われますが、米海軍発行の ARMED FORCES CROSS INDEX OF ELECTRON UBE TYPES の 1950 年版には既に obsolete となっていますので、ほんの短期間だけ作られたようです。なお、VT No.はなく、また民生用もないようです。B.P.Dowd 氏の調査では、1944 年 1 月 25 日に RMA に登録されています。

電気的な静特性は石田来氏 (JA1AVR) の測定によりますと、サンプル数が少なかった為、確定的なことは云えませんが、6V6 と大同小異とみて差し支えなさそうです。

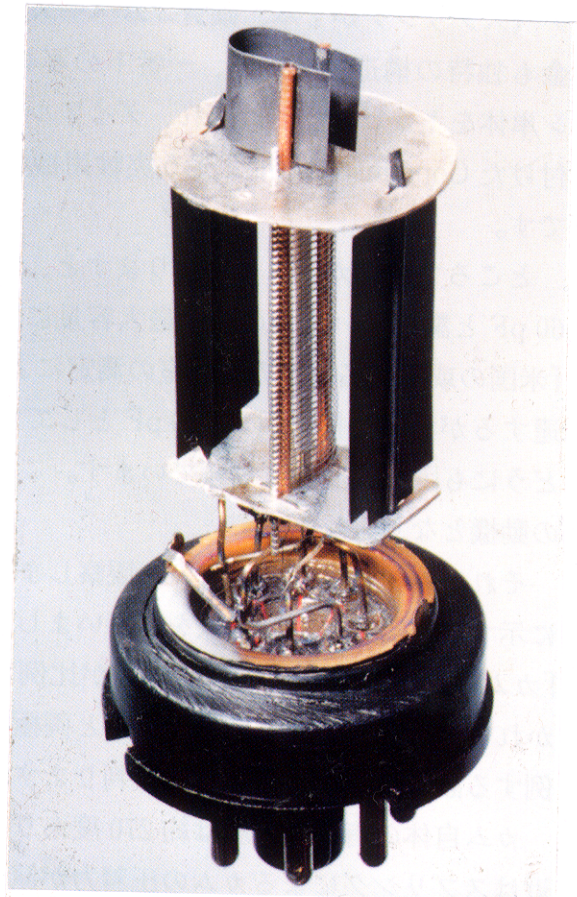
6AJ6 には-G も-GT もないので、内部を写真でお目に掛けます。丁度 6V6 を分割陽極にした感じで、その単純明快な構造はドウフォレのオーディオンバルブの近代版とでも云いたい位です。

ヒーターは 6.3V, 0.45A でカソードは 6.3V で 6V6 と同じものかと思われます。コントロールグリッドとスクリーングリッドは共に 6V6 と同じく、0.58mm ピッチでメッシュはよく揃っています。なお、6V6 のようなビームフォーミングプレートはありません。その代わり分割陽極 (12mm×25mm×2) になっていますから当然 Cout, Cpg は 6V6 より小さいものと思われます。

しかし、プレート電流密度が上がり、放熱効率も下がりますので、プレート許容損失は減ってくる筈です。

しかし、設計の設定目標が高周波帯域でデューティーサイクルの小さい用途であるなら妥当な電極構造と云えそうです。

ところが、上述の米海軍発行の資料では 6AJ6 の分類を Receiving Tetrode Amp. としているところなど、今一つ素性の知れない面もあります。



[6 AJ 6] Scale : 3 / 2